

## テルの話

金子 ヨミ（大正7年生まれ）

終戦の1年前、昭和19年ごろ、私の家族はおじいさん、おばあさん、夫と私、そして犬のテルがいました。テルは子供のいない私たちの家族の中では子供のかわりで、皆にとても可愛がられていたものです。テルは柴犬風しばいぬの日本犬、昔の人達はその茶色がかった毛並みけなの犬を赤犬と呼んでいました。赤犬は食べられる犬ともその頃聞いたことがあります。テルは家族ばかりでなく、近所の人達にも可愛がられ、その頃の飼い犬はどこでもそうでしたが、いつも気ままに歩き回っていました。いつも立ち寄る家の1軒に魚屋さんがあって、何かごほうびをもらえるのをテルは楽しみにしていたようです。

ある日のこと、戦争の為の物資を市民から供出きょうしゅつさせる役所の人達が来て、軍隊で使う靴の皮にしたいから、是非せひテルを供出してほしいと言うのです。私たち家族は、内心とても驚いて、胸がはり裂ける程悲しい気持ちになりました。皮を剥はぐためにテルは連れて行かれる、そんな酷こくなことに私は耐えられませんでした。しかし戦争に協力しなければ、非国民ひこくみんとされ、どんな仕打ちが待っているのでしょうか。拒否はできませんでした。

テルは連れて行かれる日の朝、いつものように縁えんの下の箱の中で寝ていました。声をかけるとしっぽを振り振り起きて来るのに、その日は縁の下えんの奥深く入り込んで、出て来ようともしませんでした。大好物のお餅もちをかざしても効果はなかったのです。犬を引き渡す場所でもテルは逃げ出してしまいましたが、やはり主人のいる所に戻ってきて、最後は捕まえられてしまったのです。その後、テルは、皮を剥がされたのか、それとも肉として食べられたのか知る由もありません。小首を少しかしげながら見あげる可愛かわいいまなざしのテルとこのような別れを経験した私達は、その後1度も犬を飼う気になれませんでした。

テルの思い出は、人の心を恐ろしいものに変えてしまう戦争の時代の暗さと共に、いつも私の心の中に生きています。